


六 花



2011 平成23年
俳句雑誌りつか

11月号

Cover designed by Little Bird

追悼ことり（鳥川昌実さん）

朝
粥
や
小
鳥
の
声
を
聞
き
な
が
ら

葬儀当日晴れ女なのにどしや降り

よく降ると桜紅葉に父つぶやく

秋灯や遺品整理の母の指

吾亦紅父が手向けて守りをり

姉が来て妹が来て秋の夜は

ことり忌の名誉主宰を奉る

ことり生前の希望は「くちなし忌」だった。理由は聞かずじまい。

澄む水の泣きけり木根橋の下

百句再掲載抄

芝不器男 俳句新人賞

大石悦子奨励賞受賞作品百句再掲載

ことり

誰だつていいだらう裸で生きる
裸足でゆくがよい痛みは嘘だ
汗だくで目が覚めた夢は忘れた
皺だらけの夏布団お似合ひだよ
死にたいと笑ふ生きたいと泣く夏
笑みつつ 呟く 滝壺に帰れる
握り締めた拳 滝水にほどく
滝水に流す子守歌にくるみ
滝が落ちる水が壊れきつてゐる
うすつぺらい手 滝水に遊ばせる
日焼けばかり気にしてお嬢さんだよ
泳ぐほど深まる痛みよいだらう
人が映像に見えて夏の浜辺

夕焼けの浜辺あしあとは波にやる
夏の夜の浜辺光るものを踏んだ
時計に日が差す又夏のいちにち
鉄柵に凭れる血のやうな汗だ
汗を舐める海から生まれて来た
汗が流れてゐる血は入れ換はらぬ
夏草になる走るだけ走つたら
青田の匂ひがするだけで笑へた
ひとつ見つけてひとつ失くす短夜
クスリを並べてゐる短夜である
血の跡がある蚊でも踏んだのだらう
受け入れた 躰扇 風機で洗ふ
夜名告りながら遠くなるほととぎす
首をへし折る 時鳥の判決
美意識がどうした空蝉を砕く
踏めるものなら踏めと蝉が転がる
夏をくひとめたいか蝉がまだ鳴く
蝉を食ひ尽くす蟻翅が残つた

信号の柱に隠る酷暑かな

永田万年青

しんごうのはしらにかくるこくしよかな ながたおもと

打ち水に生まれて来たる風の道

打ち水や路地から路地へ風の道

時かけて爪を抜きけり蟬の羽化

年寄りの撥さばき良き盆の唄

酷暑とは文字通り酷な暑さ。その暑さに閉口しながら市街を歩く。交差点を渡ろうとしたら折悪しく信号が赤になった。赤信号を待っている間さえ耐え難い炎暑。その灼けつくような太陽から少しでも身をかわそうと、信号機の細い柱の影に隠れるようにした。こんなことをしても焼石に水の効果しか得られないことは知っている。けれどせめて顔だけでも影に入りたいのである。やけつく炎昼の葉をも掴みたい心理を一本の信号機の柱で表現したところが秀でている。万年青さんはいつも骨太い作品を作る。ことりはいつも万年青俳句に刺激を受けていた。

11月号

竹の子

梶浦玲良子

水無月の入日へ貨車の突き刺さる
竹の子の召し捕られたる目鼻だち
鐘の音や鳩の浮巢の浮き沈み
歯ざしりの釣瓶あふるる油蟬
お洗濯日和蟻さんどちらまで

滝

笹村政子

蟬涙のぬくき流れや瀧祠
瀧じめりしたる句帳を持ち帰る
滴りや岩の起伏にさからはず
瘦瀧のしぶきは風に消されけり
瘦瀧のしぶきを風の消しにけり

せつじゆしゆう
雪樹集

つくつくぼふし

筒井八重子

鳴き終りつくつくぼふし飛び立たず
父と児の浴衣姿や揚げ花火
今日は晴蟬のひときは高く鳴き
室内の冷房消して又つける
墓洗ひぬれた手を拭き合掌す

風の道

永田万年青

信号の柱に隠る酷暑かな
打ち水に生まれて来たる風の道
打ち水や路地から路地へ風の道
時かけて爪を抜きけり蟬の羽化
年寄りの撥さばき良き盆の唄

蛍雪譚 六甲

定年の後ろ姿よ墓洗う 貝森 光洋

男女に限らずではあるが、特に男の背中には「物を言う」と言われている。その人の現在の心境がどうしても背中に漂う。当に「男は背なで物を言う」である。

定年になつて男の肩から様々な重荷が取り払われた。とはいえ気楽にはなつたが、肩書きをなくした寂しさも自ずと背中に現れているだろう。定年を迎えて、哀愁漂う後ろ姿が、墓を洗つて先祖供養をしているのだ。じみじみとした作品。同時発表「煙茸けむりの向こうに何を出す」の煙茸は足で蹴ると黄色の煙が霧散するもので、毒茸のように見えるが食用になるらしいが少し勇気を要する食材ではある。別名チャブクロと言ひ、白い物をキツネチャブクロ、褐色のものをタヌキチャブクロと呼ぶそうだ。なんだか化かされそうな茸の名前。大方は踏みつけると煙が吹き出して、狸か狐のように化かして、はてさて何を出してくれるのかと変な期待を持たせてくれるきのこ。まことにメルヘンな茸なのだ。「十分に芋虫平和太りせし」の作品は、芋虫の太り方が平和太りとしか言いようがない、と言う。いや嘆くのである。当世不景気と言いながらも、風呂屋に来ている人を見れば「結核ではないか」と思わせるほど痩せている人は稀だ。まさに虫も人間も平和太りなのである。光洋さんは医師だから成人病予備軍を診ている実感なのだろう。

六花集

空落きほ夕
に蟬りお立
海のぎづに
海額すきの救
にル高くつ急
空ビら破音
あり三鳴幼崩
秋個き女れ
半あ始かけ
ばりむななり

曝亡七地炎
しき夕下天
け夫のの街や
り父の部笹に海
の屋に目窓一
書に西日に印ある枚
き込日の逢ひごとく熱
みある居座に来帯
る洋れよ魚

無花桃片落青
果の刃をつかみて垂る蜘蛛の糸
熟るに水の馳せにけり
青空ありにけり

田
尻
勝
子

平
居
濤
子

藤
生
不
二
男